



Title	「改めて大阪公衆衛生協会のあり方について考える」
Author(s)	矢内, 純吉
Citation	大阪公衆衛生. 2003, 74, p. 1-1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83521
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

巻頭言

「改めて大阪公衆衛生協会のあり方について考える」

財団法人大阪公衆衛生協会会長（大阪府赤十字血液センター所長）

矢内純吉

永らく公衆衛生協会の理事を勤めてくださった八木明先生が亡くなられる前に、協会の歴史を知っておられる先生方が段々と少なくなるので、そろそろ座談会でも開いて協会の歴史を記録に留めておく必要があるのではないかとおっしゃっておられ、私も賛成であり、是非、この企画を実現したいと思っておりましたが、八木先生が病に倒れられ、結局は実行することができなくなりました。今更ながら残念に思っております。そこで、私が先輩諸兄姉から聞かせていただいた協会の理念に立ち返りながら、今後の協会の運営を活性化するための構造改革をどのようにすべきかを改めて考えてみたいと思います。

当協会は、昭和29年11月に設立されていますが、その設立趣旨は、大学と行政が連携を密にし、お互いに知恵を出し合いながら大阪の公衆衛生のレベルの向上を図ることとされております。当時、大阪大学には梶原三郎先生、関梯四郎先生がおられ、また、大阪府には古野秀雄先生、中谷肇先生、八木明先生、大阪市には中山信行先生がおられるなど錚々たる先生方が揃っておられ、加えて朝日新聞厚生事業団の加集一先生が参加して、バックアップをしてくださるなど、恵まれた状況がありました。当然ながら、府下の医学教育担当の大学や堺市、東大阪市等にも広く呼びかけ、関係者が加わることになりました。定期的に集まり、若い先生方も加わっての議論の中から、色々な新しいアイデアや実践活動が生まれたと聞いております。その結果、昭和57年には保健文化賞を受け、それを受けて昭和60年には公益法人（財団）として認可を受けたところです。

さて、協会の設立から約50年が経ちました。

この間に我が国の公衆衛生事情は著しい変化を遂げました。協会発足当時は、まだ感染症、乳幼児死亡が公衆衛生の最重要課題でしたが、現在は、成人病・生活習慣病主体の疾病構造になりました。第一次予防を越えて、「積極的な健康づくり」の時代です。当時、「公衆衛生活動は衛生教育に始まり、衛生教育に終わる」と言われており、府民の衛生知識のレベルアップに努める時代でありました。現在は、府民一人一人が自らの主体性において「自らの健康を獲得する」時代となりました。健康情報不足の時代から、情報氾濫の時代になったとも言えるでしょう。

このような時代の変遷に即応して、近年一般の各種組織の構成において、役員構成にも利用者を加えるなど、受益者直接参加型の組織づくりが常識化しつつあります。

その意味からも、当協会の組織は、発足当時の旧態依然たる形に止まっていると言え、組織役員の構成、さらに一般会員の範囲についても一考を加える時期に来ていると考えます。

たとえば、役員には、医師会をはじめ3師会や衛生関係各種団体の代表者、エイフボラントリーネットワークや公衆衛生協力会の方、時には報道関係の方にも参加をしていただく一方、広く府民の方々に会員に加わっていただくような方策も考えてみる必要があるのではないかと考えております。

次回の理事会、評議員会では、このような点を御議論いただき、少々沈滞気味になっております協会の再活性化ができればと考えております。

会員各位の御意見をお聞かせいただければと考えております。